C－14　15c前半に於ける服装美の表現　－Houpplandeを中心として－

福岡女子短大　　塩塚瑞枝

目的、中世の封建的な生活に明けくれていた人々に漸く新しい時代を告げる精神的波動が伝わる時、人々は旧来のものから脱皮しようとしながらも混迷の一時期を迎えたであろう。恐らく、14c後半から15c前期はその時期であり、美的傾向に於ても中世的残端と同時に新しいものへの意欲が明らかに現れる。Cottardiには合理性を主とする肉体美表現の新しい衣装造型への意欲が見られるが、新しいものへの意欲が素直に現象化されず、一見、逆現象の姿をとるもの、即ち、14c後半に現れた衣装、Houpplandeは一見そのような現象とも見られるのであって、之をどのように服飾史的に意義ずけたらよいのか、問題の焦点をそれにしぼって試論したい。

資料、Berry公の新祷書のminiatureを中心としながら当時の美術資料によって考える。

結果、HouppplandeについてWilcoxはLow Cantries（多分Bourgogneを指す）の影響と述べ、BradleyはSpainからの導入であるとするPlanchéの説を挙げている。それについてはFranceとBourgogne宮廷、その他、England、Spain等の相互関係によってそれらの説を検当し、又、一方、14c後半－15c前半の文化はどのような性格によってリードされていたかを焦点とし、当時の芸術的傾向、特に、観念性と自然性との関係、又、Gothic建築に於けるFlamboyant様式にふれる。と、同時に、上昇する市民の生活意識の中に芽生えた美的傾向と形式化した騎士文化の関係を探究し、そこに美の遊戯としての装飾性がどのように働いたかを分析し　それらの意義を服飾史的に位置ずける。